



マラウイとその周辺国に関するさまざまな展示物

五感で世界を感じ取る 貴重な機会を提供したい

鳥取県西部の米子市にある鳥取県立皆生養護学校には、幼稚部から高等部まで、障がいのある子どもたち66人が通う。今年11月に創立55周年を迎える同校は、生き生きとした学びの中で子どもたちの可能性を伸ばすことを目指し、地域・他校との交流事業、地元企業の協力の下で開催する職場体験実習など、さまざまな活動を行っている。

そんな皆生養護学校が2003年から毎月1回実施しているのが、わくわく体験。という名の授業だ。「手や足に障がいがあったり、言葉を話すのが不自由だったりする子どもたちは、生活の中で人と関わったり、物に触れたりする機会が限られています。幼児・児童生徒にそ



初めて目にするマラウイの主食“シマ”。材料の粉と、蒸してできたシマに触れ、感触を比べる

した体験を提供し、興味関心の幅を広げることが、わくわく体験の授業の狙いです。そう説明するのは、2015年から司書教諭として同校に勤務する黒田里理先生だ。

わくわく体験の授業を開始した翌年には、米子市国際交流員の協力を得て、異文化体験の内容も盛り込むようになった。同校の司書である木椛由里香さんは、当時のことをこう話す。「私が2007年に着任する以前は、市報やホームページをもとに、外国の様子を紹介してくれる講師の派遣を司書教諭が直接市役所に打診していたそうです。個人的なことで講師を依頼したこともありましたが、先生たちの地道な努力の下、中国や韓国、ア



民族衣装をまとい、いろいろな楽器を鳴らして楽しむ生徒たち

世界とつながる 教室

五感を使って 世界と出会う

各国の文化を体験する授業を展開している鳥取県立皆生養護学校。
“わくわく体験”と名付けられたその授業では、子どもたちが五感を使って生き生きと世界を捉え、自らの経験や関心の幅を広げている。



ヤギの皮で作った太鼓を鳴らして楽しむ児童。鳴らすと想像以上に音が響く

メリカ、インドをテーマにした授業が実施され、幼児・児童生徒たちは各国の食材に触れたり、民族衣装を着たりして、異文化を五感で楽しみ学ば、わくわくの体験を重ねていった。

同校とJICAの協力関係が始まったのは2009年のこと。体験の内容をより充実させたいという思いから、学校側がJICAに相談を持ち掛けたのだ。今では毎年5〜7月のわくわく体験の授業は、青年海外協力隊の経験者を講師に迎えて実施している。これまで、中南米、アフリカ、東

南アジア、太平洋島しょ地域など世界各地の10カ国以上を取り上げた。授業で子どもたちが、見て・聞いて・触って楽しむ民族衣装や楽器は、JICAがこの授業のために手配したり、協力隊経験者が活動国から持ち帰ったりした物。それらを中心に活用しつつ、歌やダンス、遊びなどを交えて子どもたちに異文化との出会いの場を提供している。

初めての色・音・手触りが 会場中に広がる

昨年7月のわくわく体験の講師は、マラウイで公衆衛生分野の協力隊活動を終えて帰国したばかりの池邊佳織さん。彼



子どもたちにマラウイについて紹介する池邊さん

女がまず紹介したのは、トウモロコシの粉を練って作ったマラウイの主食、シマ。だ。アレルギーなどに配慮して試食は行わないが、その分、子どもたちには手触りを楽しんでもらうことを考えた。「シマの手触りは、お餅に似てやわらかいです。自宅で調理して持って行ったので、調理の仕方は動画で見てもらいました。シマだけでなく、その材料となる乾燥トウモロコシやそれを粉にする際に使う木のすり鉢、調理器具の木のお玉なども紹介しました」

子どもたちは、マラウイの食文化に触れた他、現地の人々が歌っている動画を見たり、紙幣を手にしったりして、さまざまな「マラウイ体験」を楽しんだ。これに加えて子どもたちの関心を集めたのが、JICAと協力して用意した、マラウイ周辺国の楽器や香料だ。「特に人気だったのはバクチャーです。皆、普段出

会うことのない独特の匂いに興味を示し、香りを楽しんでいました。それから、日本のデンデン太鼓そっくりの太鼓も人気で、会場には子どもたちが鳴らす太鼓の音が響いていました」と黒田先生はうれしそうに振り返る。

わくわく体験の授業の実施に当たっては、毎回、学校側と講師との間で綿密な打ち合わせを行っている。「授業の1カ月前には、本校で打ち合わせをするんです。幼児・児童生徒たちが、実際に何かを見たり聞いたり触ったりできるような素材がないか講師の先生と一緒に考え、準備をお願いしています」と黒田先生。

黒田先生が講師に頼んでいることがもう一つある。それは、授業の中で、できるだけ子どもたちと触れ合ってもらうこと。子どもたちにとっては、人との出会いも貴重な体験の一つだと考えているからだ。今回の授業で講師を務めた池邊さんは、「これまで、特別支援学校の生徒さんたちの異文化交流の機会が限られているということを考えたことがありませんでした。今回、皆さんが興味を持って五感で異文化体験を楽しんでくれていることが伝わってきて、私もうれしかったです」と話す。

授業を受けた子どもたちは「普段できない体験ができた」と話し、先生たちも「子どもたちの経験を広げ、感性を育てるのに役立つ」と感想を寄せている。新たな世界に出会う喜びを体験することで、子どもたちの可能性と夢はますます広がっていくことだろう。